



#35

## シンデレラは突然に……

著: 藍澤たすく

イラスト: かもめ遊羽

俺の名前は木村恭平<sup>おれ</sup>。

都内の男子校に通うごく平凡な高校生。

——のはずだった。

ほんの10分ほど前までは。

「うそ、だろ……」

俺は目の前の姿見をもう一度凝視<sup>ぎやうし</sup>する。

何度見てもそこに映っているのは俺ではなく、穂積<sup>ほづみ</sup>さゆりその人だった。

穂積<sup>ほづみ</sup>さゆり——通称さゆりん——は全国に100万人規模のファンクラブを持つ国民的アイドルだ。いつも元気でニコニコな笑顔がトレードマークの14歳。今もっとも注目されている本格派の歌手でもある。

そのさゆりに、自分になっている……!?

俺は混乱する頭を必死に整理しようとした。

だが考えれば考えるほど頭の中がこんがらがってくる。

姿見の中のさゆりんも戸惑<sup>とまど</sup>った顔で心配そうにこちらを見つめていた。

——可愛いなあ。

俺は思わず、ため息をついた。

なぜならご多分に洩れず、俺も熱心な「さゆりすと」だったからだ。

さゆりんのCDは勿論、コンサートにもすべて足を運んでいるし、写真集だって全部持っている。直筆サイン入りのポスターは俺の一生の宝物だ。ちなみにファンクラブ会員ナンバーは1678045な。

俺は深呼吸をして目の前の姿見をもう一度見つめた。

何度見てもそこに映っているのはさゆりんそのものだ。

にこっ。

ちよつと微笑<sup>ほほえ</sup>んでみる。

「ああああああ、さゆりんが俺に微笑みかけてくれるうううううううう」

あまりの感激に俺は思わずその場にへなへなと座り込む。

舞台衣装のひらひらしたスカートが空気を孕<sup>はら</sup>んでふわりと花のようにふくらんだ。瞬間、少し前かがみになった胸元からおだやかな膨<sup>はく</sup>らみがちらつと垣間見えた。

「――！」  
俺は思わず紅あかくなって目を逸そらす。

同時に鏡の中のさゆりんも恥はずかしそうに目を逸そらした。

そうか。そうだ、これは夢なんだ。

熱心な「さゆりすと」である俺に神様が見せてくれた、ほんのつかの間の「ご褒美ほうびなんだ。

「ご褒美なら……ちらつとくらい見ても……いいよな……」

俺はおそろおそろドレスの胸元に指をかける。

「さゆり！ いるんでしょ!? 開けるわよ！」

「は、はひ!?」

突然ドアが激しくノックされたあと、勢いよく開けられた。

そこに居たのはタイトスカート姿の赤い眼鏡めがねの女性だった。

見るからに気の強そうな、キャリアウーマンタイプの印象を受ける。

さゆりんのマネージャーさんだろうか？

「あと10分でコンサート本番なんだから！ ほら、早く来る！」

「え？ え？」

俺はその女性に手を引かれ、訳も判らずそのまま廊下ろうかを走らされる。  
コンサートって……。

「！」

記憶がフラッシュバックする。

ほんの10分前、俺は入場の列に並んでいた。

それはもちろん「センセイショナルシンデレラ日本縦断ツアー・ふあいなる！」の列だった。

1ヶ月も前からずっと楽しみにしていたのだ。

そんな俺が今はさゆりんで、しかもそのコンサートを俺自身がやるだって……!?

「む、無理むづかだってそんなの！ だ、だって俺は……」

言いかけたところで大音量の曲が聴きこえてきた。

これは「Heart to Heart」のイントロ――。

さゆりんのコンサート1曲目の定番で、俺がさゆりんの曲の中でも一番好きなのやつだ。

それを聴いた瞬間、そのリズムにのせられるように、俺の鼓動こどうが速くなっていく。

体温が上がり、頭しんが芯しんからぼーっとして、熱い熱い高揚感こうやうかんが押し寄せてくる。

そう、いつまでも浸ひたっていたいような、心地よい高揚感こうやうかんが……。

「さ、いつてらっしやい！」

マネージャーと思おぼしき女性に肩をぼん、と押し出された俺は何のためらいもなく、自然に舞

台へと走り出していた……。

やりきった――。

「すごいわ、さゆりー！ どうしたの!? 今日ほまるで別人みたいだったわよ!! 素晴らしいわ!!」

マネージャーさんが興奮した様子で俺にミネラルウォーターを差し出し出してくる。

「えへへ……」

3万人のフアンの前で、俺は完璧に歌い、踊り、2時間近いパフォーマンスをこなしていた。当然だ。

さゆりんの曲で俺が知らない曲なんてないし、振り付けだって完璧に覚えている。

自分で言うのもなんだが、これまでのさゆりんのコンサートの中でも、一番盛り上がりつついるのではないだろうか。

……「さゆりん」の、っていうか「俺」の、なんだけど……。

「よかったわ。その様子だと、引退のこと考え直してくれたみたいね」

「え？」

マネージャーさんが穏やかな笑みを浮かべている。

それはどこかほっとしたような表情でもあった。

……引退？ さゆりんが？ まさか……。

「さ、アンコールよ。最後まで気を抜かないでね！」

「はい……」

俺は釈然としないまま、小さく頷いて舞台に戻った。

大歓声がまた俺を熱狂的に迎えてくれる。

引退って……。

アンコールの曲のイントロが流れてくる。

瞬間、絨毛立った。

「――!」

俺の知らない曲……!?

新曲？ アンコールで？ そんな馬鹿な!? それとも単に俺が知らないだけ……??

いやいやいや、さゆりんのことで俺が知らないことなんて何ひとつないはずだ!

だったらこれは一体……。

助けを求めて舞台袖を見ると、マネージャーさんは携帯を持って何やら嬉しそうな顔で話し込んでいた。この危機的な状況に気づいた様子はない。

（ど、どうしよう……このままじゃ……）

おろおろとする俺の視界にある物が突然飛び込んできた。

（——「俺」だ！）

それは、今まさに会場をあとにして帰ろうとしている俺——木村恭平の姿だった。

「ま、待って!!」

俺は矢も盾もたまらず舞台を飛び降り、出口に向かってセンターロードを走り出した。

「さゆり!？」

背後でマネージャーさんが驚く声<sup>おどろ</sup>が聞こえる。

ファンはこれも演出の一部と勘違いしたのか、熱狂したまま、走り去る俺の姿を見送っている。

そして目の前の「俺」はボタンとドアを閉めてそのまま会場の外に出ていってしまった……。



「待ってくれ!」

どこをどう走ってきたか判らない。

ここがどこなのかさえも判らない。

しかし俺はようやく「俺」に追いつくことができた。

「はあ、はあ……ねえ、キミ……『さゆりん』だろ?」

切れる息の下から俺は目の前の「俺」に問いかける。

「俺」——木村恭平は静かに頷いた。

それと同時に「俺」の姿に、さゆりんの姿が二重写しになる。

「お願い……このままあたしを行かせて……」

さゆりんが切なげな表情で俺に話しかけてくる。

「行かせてっつてどこに?」

「どこか遠く……誰もあたしを知らない所へ……」

「なんでそんなこと……」

そこまで言っただけで俺の脳裏<sup>のうみ</sup>に先ほどの言葉が甦<sup>よみがえ</sup>った。

——よかったわ。その様子だと、引退のこと考え直してくれたみたいね——

「引退……するの……?」

気がつく俺は少し責めるような調子で問いかけていた。

「俺、大好きなのに……さゆりんのこと……とつてもとつても大好きなのに……どうして引退なんか!!」

感情が昂ぶり、思わず叫んでしまう。

「……誰もあたしのことなんか見てないもの……」

「え?」

「みんなが見ているのは、ただの偶像で、ただの虚像……本当のあたしのことなんて誰一人見なくてないもの!」

さゆりんの叫びに、俺はハツとして体を強ばらせた。

「いつも元気になんてできないよ! いつもニコニコなんてできないよ! あたし……あたし、そんな強くないもの! そんなに強く、歌い続けられないもの!」

振り絞るような叫びに、俺はどうすることもできず、ただただ立ち尽くしてさゆりんを見つめるだけだった。

俺はさゆりんのことなら何でも知っていると思っていた。

知らないことなんてないと思っていた。

でも違った。

一番大切なことを——さゆりんが、ただの女の子で、その女の子が一人、孤独に苦しんでるつてことを——何ひとつ判っていないかった。

言葉を失った俺にさゆりんが続ける。

「それに今日のあなたの方がよっぽど『さゆりん』だったわ……ステージを見ていて本当にそう思った……あなたは、みんなの求める『さゆりん』そのものだった……あたしなんて必要ない……」

「さゆりん……」

彼女の言葉に、俺はとどめを刺された気分だった。

もう、どうしていいのか判らなくなる。

ただ拳をぎゅつと握って、唇を強く噛むばかりだった。

「じゃ、あたし行くね……。ばいばい、『さゆりん』」

「——!」

俺の目の前からさゆりんが消えようとしている。

そして俺は何もできない。

声をかけることも、引き留めることも、なにも——。

俺は、無力だ——。

「……手をのばす……」

「え？」

「その先に、ある……♪」

さゆりんが驚いて足を止める。

俺は無意識のうちに「Heart to Heart」を歌い始めていた。

「輝きをつかむまで♪ あきらめないで♪」

「……………」

心を込めて、俺は歌う。歌い続ける。

「キミはひとりじゃない♪」

「……………」

さゆりんがハッとして息を呑む気配が伝わってきた。

俺はただただ、無心で歌い続ける。

「ずっとそばにいる♪」

「……………」

不意に俺の声とさゆりんの声が重なった。

見ると目の前のさゆりんは涙ぐんでいた。

「……………」  
Heart to Heart — Heart[Two Heart —]

歌う彼女の瞳から、ぼろりと大きな涙の粒が零れた。

瞬間、会場中の観衆の熱狂が最高潮に達した。

アンコールに「Heart to Heart」が来るのは初めてだ。

俺も他の「さゆりすと」達同様、興奮していた。熱狂していた。

そして必死にサイリウムを振りながら、ステージのさゆりにエールを送った。

それに応えるようにさゆりんはさらにパワフルに「Heart to Heart」を歌い上げる。

心の底まで響くような、とてもとても澄んだ歌声だった。

「今日はみんな、本当にありがとう——」

「Heart to Heart」を歌い終わったさゆりんは大きく手を振って舞台袖に向かっていく。

俺はあまりの充足感が力が抜け、そのままパイプ椅子の上へへたり込んだ。

今日のステージのさゆりんは、いつも以上に輝いて見えた。

そしていつも以上に身近に感じられた。

そう、まるでさゆりんと「一心同体」になったかのような……。

そんな心地良い高揚感に、俺はゆつたりと浸り続けたのだった。

おしまい